



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 北海道帝国大学における文部省在外研究員の選考・派遣について                                                     |
| Author(s)        | 山本, 美穂子                                                                           |
| Citation         | 北海道大学大学文書館年報, 20, 61-88                                                           |
| Issue Date       | 2025-03-31                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/94787">https://hdl.handle.net/2115/94787</a> |
| Rights           | (c) 2025 Hokkaido University Archives                                             |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 20_04.pdf                                                                         |



## < 研究ノート >

# 北海道帝国大学における文部省在外研究員の選考・派遣について

山本 美穂子

### はじめに

戦前期の1920～1940年代、文部省の外国留学生派遣制度の法的準拠は、1920年9月に「文部省外国留学生規程」（1892年11月21日制定、勅令第百二号）から「文部省在外研究員規程」（1920年9月14日制定、勅令第三百九十三号）に、1922年1月には文部省・通信省・水産講習所・関東庁・台湾総督府・朝鮮総督府の関連規程（外国留学生規程、在外研究生規程、在外研究員規程）を廃止して一元化した「在外研究員規程」（1922年1月21日制定、勅令第六号）へと移行した。

これまで、北海道帝国大学（1918年設置）における文部省在外研究員については、大学沿革史（『北大百年史』、『北大百二十五年史』等）の通史で記述されることはなく、在外研究員数の集計もされていない。学部の沿革史（『北大工学部五十年史』1975年、『北大医学部五十年史』1974年、『北大理学部五十年史』1980年）が学部創設時の記述の一環として教官候補者の在外研究に触れているが、1920～1940年代の派遣状況を通覧できる記述には至っていない。

一方、大学沿革史では、『東京大学百年史 通史二』（東京大学出版会、1985年）が「在外研究と留学」という節を設けて、在外研究員の派遣の大まかな傾向（学部別、在留国別）を記述している。『東京帝国大学一覧』を典拠に算出した1920～1940年度の在外研究員数は136名を数えている。近代日本における留学史研究としては、辻直人『近代日本海外留学の目的変容 文部省留学生の派遣実態について』（東信堂、2010年）が所属別（旧制高校、帝国大学）・研究分野別・国別の数量分析をもとに、1920年までの派遣傾向と背景を考察しているが、在外研究員制度に移行後の1920～1940年代の分析・考察までには至っていない。

本稿では、北海道帝国大学が在外研究員制度をどのように運用したのか、北海道大学文書館が所蔵する議事録（評議会、農学部教授会、工学部教授会、理学部教授会）、在外研究員に関する簿冊（「在外研究員関係書類 自大正十二年至大正十五年」、「在外研究員関係書類 自昭和二年至〃九年」）を主な典拠として、在外研究員候補者の選考・派遣過程の背景と特徴を考察する。

なお、本稿では、「文部省在外研究員規程」及び「在外研究員規程」に基づく文部省の派遣をあわせて、「文部省在外研究員」として表記する。

本稿の構成は、第一章で「文部省在外研究員規程」・「在外研究員規程」の条項を確認し、第二章で北海道帝国大学における派遣数とその背景を示し、第三章で在外研究員候補者の推薦・上申に至る選考過程とその特徴を考察するものとする。

また、本稿の巻末には、1920年9月14日以降に発令された、北海道帝国大学における文部省在外研究員の一覧（氏名・研究学科目・在留期間・在留国、発令当時の身分・学位）を、文部省専門学務局『文部省在外研究員表』（1921年3月31日現在～1939年3月31日現在）をもとに作成し、上記議事録・履歴資料等で補って掲げる。

## 1. 「文部省在外研究員規程」及び「在外研究員規程」の条文内容について

### 1-1. 「文部省在外研究員規程」の条文内容について

「文部省在外研究員規程」（1920年9月14日制定、勅令第三百九十三号）は、第一条～第十一条の条文・附則・別表（在外研究員旅費定額表）の構文で、条文内容は次のとおりである<sup>1)</sup>。文部省在外研究員は、外国において「学術技芸」を研究させるため、文部大臣が文部省直轄学校教官及び文部大臣が適当と認めた者を対象に任命し、研究科目・在留国・在留期間等を指定した。学資・支度料・旅費のほかに、特別の手当（巡歴・在留地移転等の費用）も支給された。在留中は定員外としたが、帰国後には奉職義務（在留期間の2倍に相当する期間）があった。違背した者・不都合の行為がある者・成業目途がない者は免ぜられ、支給金を償還しなければならなかった。

第一条 文部省在外研究員ハ外国ニ於テ学術技芸ヲ研究セシムル為文部省直轄学校教官其ノ他文部大臣ニ於テ適当ト認ムル者ニ就キ文部大臣之ヲ命ス

第二条 文部省在外研究員ノ研究科目、在留国及在留期間其ノ他必要ノ事項ハ文部大臣之ヲ指定ス

第三条 文部省在外研究員ニハ学資支度料及旅費ヲ給ス

学資ハ月額三百六十円、支度料ハ七百円以内トス

旅費ハ別表ニ依ル但シ別表ニ掲ケサル国ニ在留スル者ニ給スル旅費ハ別表ニ準シ其ノ最高額以内ニ於テ文部大臣之ヲ定ム

在留国ニ以上ニ互ル場合ニ於テ在留期間ノ旅行ニ付テハ支度料及旅費ヲ給セス

特別ノ事由アルトキハ学資支度料及旅費ハ之ヲ減額支給スルコトヲ得

第四条 文部省在外研究員研究上各地ヲ巡歴シ又ハ在留地ヲ転スルトキ其ノ他特別ノ事由アルトキハ相当ノ手当ヲ給スルコトヲ得

第五条 文部省在外研究員本邦出発前死亡シ又ハ官ノ都合ニ依リ文部省在外研究員ヲ免セラレタルトキハ支度料ノ全部又ハ一部ヲ給スルコトヲ得

文部省在外研究員本邦出発後死亡シタルトキハ死亡地ヨリ本邦出発港迄外国旅費規則ニ準シ旅費ヲ給ス

第六条 文部省在外研究員旅行中疾病、変災其ノ他避クヘカラサル事由ニ依リ同一地

ニ滞在スルコト七日ヲ超過スルトキハ其ノ超過日数ニ対シ日額二十円ノ割合ヲ以テ別ニ旅費ヲ給スルコトヲ得但シ船舶中ノ滞在ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第七条 文部省在外研究員文部大臣ノ命令ニ違背シタルトキ、不都合ノ行為アリタルトキ又ハ成業ノ目途ナキニ至リタルトキハ文部大臣ハ之ヲ免スルコトヲ得

第八条 文部省在外研究員ハ帰朝ノ日ヨリ其ノ在留期間ノ二倍ニ相当スル期間文部大臣ノ指定スル職務ニ従事スル義務ヲ有ス

第九条 第七条ノ規定ニ依リ在外研究員ヲ免シタル者又ハ前条ニ規定スル義務ヲ尽サル者ニハ之ニ支給シタル学資、支度料、旅費及手当ヲ償還セシム但シ特別ノ事情アルトキハ償還義務ノ一部又ハ全部ヲ免除スルコトヲ得

第十条 学資、支度料、旅費及手当ハ前金渡ヲ為スコトヲ得但シ学資ハ六月分以内ニ限ル

第十一条 官吏ニシテ文部省在外研究員ヲ命セラレタル者ハ本邦出發ノ日ヨリ帰朝ノ日迄之ヲ定員外ト為シ俸給ヲ給セス但シ時宜ニ依リ特ニ俸給ノ半額以内ヲ給スルコトヲ得

前項ノ規定ハ官吏ニ非サル文部省在外研究員ニシテ文部省直轄学校教官ニ任セラレタル者ニ付之ヲ準用ス

附則では、①本令は公布日より施行すること、②「文部省外国留学生規程」を廃止すること、③本令施行の際に文部省外国留学生である者は文部省在外研究員と看做すこと等が示された。

## 1-2. 「在外研究員規程」の条文内容について

次に、「在外研究員規程」（1922年1月21日制定、勅令第六号）は、第一条～第十八条の条文・附則・別表（学資金・巡歴手当の高等官・判任官別支給額）の構文で、条文内容は次のとおりである<sup>2)</sup>。在外研究員は、「學術技芸」を研究させるため、主管大臣（文部省の場合は文部大臣）が選抜・任命し、研究事項・在留国・在留期間等を指定し、外国に派遣した者である。学資金・巡歴手当・旅費のほか、家族手当・特別手当が支給され、「特別ノ任務」に従事する場合も旅費が支給された。在留中は定員外としたが、帰国後には奉職義務（在留期間の2倍に相当する期間）があった。違背した者・成業目途がない者は免ぜられ、学資金・巡歴手当・特別手当・旅費を償還しなければならなかった。

第一条 主管大臣ハ其ノ主管事項ニ関シ須要ノ學術技芸ヲ研究セシムル為在外研究員ヲ外国ニ派遣スルコトヲ得

第二条 在外研究員ハ選抜ニ依リ主管大臣之ヲ命ス

第三条 在外研究員ノ研究事項、在留国、在留期間其ノ他必要ナル事項ハ主管大臣之ヲ指定ス

第四条 在外研究員ニハ本令ノ定ムル所ニ依リ学資金、巡歴手当及旅費ヲ支給ス

特別ノ事由アルトキハ所管大臣大蔵大臣ト協議シテ前項ニ定ムルモノノ外特別手当

ヲ支給スルコトヲ得

第五条 学資金及巡歴手当ハ別表ニ依ル但シ官吏ニ非サル者ニ付テハ所管大臣大蔵大臣ト協議シ別表ニ準シテ之ヲ定ム

第六条 学資金ハ最初ノ在留地到着ノ翌日より帰朝ノ途ニ就ク前日迄月割及日割ヲ以テ之ヲ支給ス

在留国間移転ノ場合ニ於テハ前在留地ヲ出発シタル日ノ翌日より後在留地ニ付定メタル学資金ヲ支給ス

第七条 各地ヲ巡歴研究スル場合ニ於テハ旅費ヲ支給セス巡歴手当ヲ支給ス

第八条 旅費ハ本邦在留国間往返ノ場合又ハ在留国間移転ノ場合ニ於テ外国旅費規則ノ定ムル所ニ依リ本人相当ノ鉄道賃、船賃、車馬賃、日当、宿泊料、食卓料及支度料ヲ支給ス

第九条 外国在留中特別ノ任務ニ従事スル場合ニ於テハ外国旅費規則ノ定ムル所ニ依リ旅費ヲ支給スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ旅費ヲ支給スル場合ニ於テハ学資金及巡歴手当ハ之ヲ支給セス

第十条 外国旅費規則中死亡手当ニ関スル規定ハ在外研究員ニ付之ヲ準用ス

第十一条 学資金及巡歴手当ハ前金払ヲ為スコトヲ得但シ学資金ニ付テハ六月分ヲ超ユルコトヲ得ス

第十二条 在外研究員ヲ命セラレタル官吏ハ本邦出発ノ日より帰朝ノ日迄之ヲ定員外ト為スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ定員外ト為リタル者ニハ俸給ヲ支給セス但シ時宜ニ依リ其ノ俸給ノ三分ノ二以内ヲ支給スルコトヲ得

第十三条 特別ノ事情アルトキハ官吏ニ非スシテ在外研究員ヲ命セラレタル者ニ年額二千五百円以内ノ家族手当ヲ支給スルコトヲ得

前項ノ規定ハ前条第一項ノ規定ニ依リ定員外ト為リタル在外研究員ニ之ヲ準用ス但シ同条第二項ノ規定ニ依リ受クル金額ト家族手当ノ額ト合シテ俸給ノ三分ノ二ヲ超ユルコトヲ得ス

第十四条 在外研究員ハ帰朝ノ日より外国在留期間ノ二倍ニ相当スル期間主管大臣ノ指定スル職務ニ従事スル義務ヲ負フモノトス但シ帰朝ヲ為サシメスシテ直ニ外国ニ在勤ヲ命シタル場合ニ於テハ其ノ期間ハ在勤ヲ命シタル日より之ヲ起算ス

第十五条 在外研究員主管大臣ノ命令ニ違背シタルトキ又ハ成業ノ目途ナキニ至リタルトキハ之ヲ免スルコトヲ得

第十六条 第十四条ノ義務ヲ履行セス又ハ前条ノ規定ニ依リ研究員ヲ免セラレタル者ノ受ケタル学資金、巡歴手当、特別手当及旅費ハ之ヲ償還セシム但シ特別ノ事情アルトキハ其ノ全部又ハ一部ヲ免除スルコトヲ得

第十七条 特別ノ事情ニ因リ本令ニ依リ難キ場合ニ於テハ所管大臣大蔵大臣ト協議シテ学資金及巡歴手当ニ関シ別段ノ定ヲ為スコトヲ得

第十八条 本令中主管大臣ノ職務ハ朝鮮ニ在リテハ朝鮮総督、台湾ニ在リテハ台湾総督、関東州ニ在リテハ関東長官、樺太ニ在リテハ樺太庁長官之ヲ行フ

附則では、①本令は公布日より施行すること、②「文部省在外研究員規程」等を廃止すること、③本令施行の際に旧令による外国留学生・在外研究生・在外研究員は本令による在外研究員と看做すこと等が示された。

その後、「在外研究員規程」は1934年9月、第十八条の条文における「関東州」が「関東州及南満洲鉄道附属地」に、「関東長官」が「満洲国駐劄特命全権大使」に部分改正された<sup>3)</sup>。

## 2. 北海道帝国大学における文部省在外研究員の派遣人員数の変化とその特徴

### 2-1. 1920～1941年度における文部省在外研究員の派遣者数とその背景

北海道帝国大学における文部省在外研究員の派遣は、1920年9月14日以降に発令された者を算出すると表1のとおりとなる。1920～1941年度にかけて計125名が派遣された。

表1 北海道帝国大学における文部省在外研究員の派遣者数（1920～1941年度）

| 年度    | 農学部 | 医学部 | 工学部 | 理学部 | 土専 | 水専 | 予科 | 本部 | 計（人数） |
|-------|-----|-----|-----|-----|----|----|----|----|-------|
| 1920  |     | 1   |     |     |    |    |    |    | 1     |
| 1921  | 2   | 3   |     |     |    | 2  |    |    | 7     |
| 1922  | 4   | 4   | 4   |     | 1  | 1  | 2  |    | 16    |
| 1923  | 3   | 1   | 10  |     |    |    | 1  | 1  | 16    |
| 1924  | 1   |     | 2   |     |    |    |    |    | 3     |
| 1925  | 1   | 2   | 2   |     |    |    | 1  |    | 6     |
| 1926  | 5   | 5   | 2   |     | 1  |    |    |    | 13    |
| 1927  | 4   | 3   | 2   | 3   |    | 1  | 1  |    | 14    |
| 1928  | 1   | 1   | 1   | 11  |    |    | 1  |    | 15    |
| 1929  | 1   | 1   | 1   | 1   |    |    |    |    | 4     |
| 1930  | 2   | 1   | 1   |     |    | 1  |    |    | 5     |
| 1931  | 1   | 1   |     |     |    |    | 1  |    | 3     |
| 1932  |     | 2   | 2   | 1   |    |    |    |    | 5     |
| 1933  | 1   |     |     |     |    |    |    |    | 1     |
| 1934  | 1   |     |     |     | 1  |    |    |    | 2     |
| 1935  | 2   | 1   | 1   |     |    |    | 1  |    | 5     |
| 1936  |     | 3   | 1   | 1   |    |    |    |    | 5     |
| 1937  | 1   |     |     |     |    |    |    |    | 1     |
| 1938  |     | 1   |     |     |    |    |    |    | 1     |
| 1939  |     |     |     |     |    |    |    |    | 0     |
| 1940  | 1   |     |     |     |    |    |    |    | 1     |
| 1941  | 1   |     |     |     |    |    |    |    | 1     |
| 計（人数） | 32  | 30  | 29  | 17  | 3  | 5  | 8  | 1  | 125   |

注）巻末一覧をもとに作成した。1920年度は9月14日発令以降の人数とし、年度人数は文部省在外研究員の在留地到着日をもとに算出した。土木専門部は「土専」、水産専門部は「水専」と略記した。

1920年代は新設の3学部（医学部：1919年4月設置、工学部：1924年9月設置、理学部：1930年4月設置）の教官候補者の派遣が相次ぎ、1922・1923・1926～1928年度は派遣者数が二桁に達している。1930年代は世界恐慌による政府の財政難から文部省の在外研究員予算も削減され、派遣数が減少した。さらに、1937年の日中戦争以降は派遣数が激減し、1939年ドイツがポーランドに侵攻して渡欧・滞欧が困難となり、1941年日米開戦により渡米が出来ない状況に陥った。1938年度の1名派遣は、医学部の木村正一助教授（衛生学講座）が Johns Hopkins University への私費留学（1年間）を認められたものであり<sup>4)</sup>、予算配当されたものではない。

しかし、後述するように、1937年以降の戦時期には、文部省専門学務局が通常の枠組とは異なる派遣を内示し、北海道帝国大学では1940～1941年の派遣につながった。1942年度以降は、北海道帝国大学の評議会・教授会（農学部、工学部、理学部）議事録に文部省在外研究員に関する記述が見当たらず、1941年度の派遣が最後であったと考えられる。

## 2-2. 1920年代における文部省在外研究員の派遣内訳とその特徴

1920年代における北海道帝国大学における文部省在外研究員の派遣内訳は、農学部22名、医学部21名、工学部24名、理学部15名、予科6名、土木専門部2名、水産専門部4名、本部1名（農学部講師兼務の事務官）である（表2）。1920～1929年度にかけて計95名が派遣され、この期間に派遣された文部省在外研究員数は全体の76%にあたる。

1920年9月14日以降に文部省在外研究員の発令を受けた者は、医学部の教授予定者（内科学講座）であった有馬英二（前朝鮮総督府医院医官兼京城医学専門学校教授）が最初である。1920年12月18日付に発令を受けた内科医の有馬は、在留期間2カ年が通例のところ、在留10カ月の短期で英・仏・独逸国を巡り、医学部附属医院が1921年11月に開院する前に帰国した<sup>5)</sup>。医学部（1919年4月設置）では1922年度からの開講にあたり、学科目担当の教官を配当するため、先に任用すべき教官を「斯学研究ノタメ」に「文部省外国留学生」として海外へ派遣していた。既に文部省外国留学生として派遣された教授予定者（宮崎彪之助：生理学、太黒薫：医化学、山崎春雄・平光吾一：解剖学、今裕：病理学、三輪誠：薬物学、中村豊：細菌学、香宗我部寿：耳鼻咽喉科学）は、1920年9月14日付で「文部省在外研究員」と看做され、1921年度には主たる基礎学科目の担当教官が帰国した<sup>6)</sup>。

一方、「特派」枠での派遣者は20名、その内訳は、①北海道帝国大学工学部の教官候補者（教授・助教授予定者）16名、②他の高等教育機関への転出見込者（教授予定者）5名であった。

工学部（1924年9月設置）では、1921年より工学部創立委員会のもとに開学準備を進め、教官候補者を1922年度から文部省在外研究員として派遣し、1925年度からの開講に備えた<sup>7)</sup>。工学部の教授予定者24名のうち、小川敬次郎（東北帝国大学附属工学専門部教授、混凝土学）・山田陽清（九州帝国大学助教授、水工学）は所属大学の枠組で既に派遣されており、外国留学歴（1901～1905年、米・独・瑞西）のあった工学部創立委員の吉町

太郎一（九州帝国大学工学部長、橋梁学）は外国出張（1924年1～7月）<sup>8)</sup>となった。吉町は、文部省在外研究員として派遣された者（浅見義弘：電気磁気学、堀義路：応用力学、清水義一：電気機械学、井伊谷春平：原動機学、三浦勝：鉱山学、鳥山四男：電力応用学、佐山總平：鉱山学）たちと、1924年5月3日ロンドンで会合（非公式第一回教授会）をしている<sup>9)</sup>。上記3名（小川、山田、吉町）以外の教授予定者21名は、1922～1928年度にかけて文部省在外研究員として全員が派遣された。

表2 北海道帝国大学における文部省在外研究員の派遣者内訳（1920～1929年度）

| 年度   | 在留地<br>到着者数 | 内訳（部局、人数、在留者氏名）                                                                                                                                          |
|------|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1920 | 1           | 医学部1（有馬英二）                                                                                                                                               |
| 1921 | 7           | 農学部2（【特派】逸見武雄、伊藤誠哉）、医学部3（中川諭、大野精七、戸塚文卿）、水産専門部1（高橋栄治）、予科1（【特派】並河功）                                                                                        |
| 1922 | 16          | 農学部4（【特派】近藤金助、井口賢三、小熊捍、【特派】森岡勇）、医学部4（柳壮一、志賀亮、木下良順、永井一夫）、工学部4（【特派】大賀恵二、【特派】古藤猛哉、【特派】池田芳郎、【特派】鷹部屋福平）、土木専門部1（【特派】根来簡二）、水産専門部1（佐々茂雄）、予科2（福富忠男、高杉栄次郎）         |
| 1923 | 16          | 農学部3（宮脇富、【特派】奥田彥、市川厚一）、医学部1（中島高一）、工学部10（【特派】堀義路、【特派】浅見義弘、【特派】山田紹之助、【特派】阿久津国造、【特派】佐山總平、【特派】小串孝治、【特派】佐野新三郎、【特派】井伊谷春平、【特派】清水義一、【特派】鳥山四男）、予科1（成田秀三）、本部1（大岡叢） |
| 1924 | 3           | 農学部1（上原徹三郎）、工学部2（【特派】三浦勝、【特派】倉塚良夫）                                                                                                                       |
| 1925 | 6           | 農学部1（影山純介）、医学部2（内村祐之、朴澤進）、工学部2（【特派】高桑健、小野諒兄）、予科1（青葉万六）                                                                                                   |
| 1926 | 13          | 農学部5（後藤一雄、小華和忠士、山根甚信、松田武雄、犬飼哲男）、医学部5（小田俊郎、熊埜御堂進、橋本昌造、岩田正道、松岡喬）、工学部2（宗宮知行、上床国夫）、土木専門部1（西田辰三郎）                                                             |
| 1927 | 14          | 農学部4（中島広吉、小林巳智次、前川徳次郎、枋内吉彦）、医学部3（酒井隆吉、岡田正夫、井上善十郎）、工学部2（児島茂、久次米三夫）、理学部3（杉野目晴貞、長尾巧、太秦康光）、水産専門部1（佐々木望）、予科1（青山延敏）                                            |
| 1928 | 15          | 農学部1（市川厚一）、医学部1（野村男也）、工学部1（多和田寛）、理学部11（中谷宇吉郎、中村儀三郎、山田幸男、鈴木醇、功力金二郎、吉田洋一、柴田善一、河口商次、茅誠司、松浦一、原田準平）、予科1（鈴木庄治郎）                                                |
| 1929 | 4           | 農学部1（菊地武直夫）、医学部1（安田守雄）、工学部1（大坪喜久太郎）、理学部1（内田亨）                                                                                                            |
| 計    | 95          |                                                                                                                                                          |

注）巻末一覧をもとに作成した。

工学部の教官候補者以外の「特派」枠での派遣者5名については、3名〔逸見武雄（植物病理学）・並河功（園芸学）・近藤金助（栄養化学）〕が京都帝国大学農学部（1924年設置）、1名〔森岡勇（有機製造化学）〕が岐阜高等農林学校（1923年設置）、1名〔根来簡二（土木工学）〕が山梨高等工業学校（1924年設置）の教授予定者であり、1920年代に増設された高等教育機関への転出となった。

京都帝国大学農学部の教授候補者の推薦については、農学部創設委員会委員の石川日

出鶴丸（1878-1947、京都帝国大学医学部教授）から推薦協力の依頼を受けた宮部金吾（1860-1951、北海道帝国大学農学部教授）が、札幌農学校・東北帝国大学農科大学卒業生より候補者8名を出している（図1）<sup>10)</sup>。この内7名は、農学部創設委員会の配布資料「農学部教授候補者（在外研究員候補者）」（1921年6月18日附議）にも載っており、農学部創設委員会において審議された（図2）<sup>11)</sup>。



図1 宮部金吾が記した京都帝国大学農学部教授候補者8名  
（1921年2月6日付封書の裏書き）

| 姓 名       | 年 齢          | 現 職 | 専 門 科 目 |
|-----------|--------------|-----|---------|
| 石 山 信 一   | 東大 農学 大正五年   | 農学  | 農学      |
| 柳 井 正 門   | 東大 農学 明治三十二年 | 農学  | 農学      |
| 早 川 正 三   | 北大 農学 明治三十二年 | 農学  | 農学      |
| 春 田 忠 吉   | 東大 農学 大正二年   | 農学  | 農学      |
| 志 見 成 雄   | 東大 農学 大正四年   | 農学  | 農学      |
| 大 崎 正 三   | 東大 農学 明治三十二年 | 農学  | 農学      |
| 金 澤 繁 一   | 東大 農学 大正四年   | 農学  | 農学      |
| 高 橋 洋 三   | 北大 農学 明治三十二年 | 農学  | 農学      |
| 北 河 功     | 北大 農学 大正五年   | 農学  | 農学      |
| 土 屋 徹 三 郎 | 北大 農学 明治三十二年 | 農学  | 農学      |
| 新 島 善 直   | 東大 農学 明治三十二年 | 農学  | 農学      |
| 松 村 松 年   | 東大 農学 明治三十二年 | 農学  | 農学      |

図2 京都帝国大学農学部創設委員会「農学部教授候補者（在外研究員候補者）」の右面  
（1921年6月18日附議）

その一方で、北海道帝国大学の農学部では、文部省外国留学生として未派遣の教授（吉井豊造、伊藤誠哉）や、講座担当教授予定者で講座分担を務めていた助教授たちが文部省在外研究員として派遣されることを待ち望んでいる状況であった。1920年代後半～1930年代にかけて、農学部は、東北帝国大学農科大学の時期から講座担任を務めていた初代教授（宮部金吾、八田三郎、松村松年、新島善直、須田金之助、時任一彦等）が定年退職し、次世代に切り替わる時期でもあった。1920年代に在外研究員として派遣が実現したものは16名（表3）、未派遣者は1930年代に繰り越されてしまい、全学での在外研究員候補者の選考に際して問題化した。

表3 農学部からの派遣者内訳（1920～1929年度）

| 派遣元の教室（研究室） | 教授   | 助教授                      | 講師   |
|-------------|------|--------------------------|------|
| 植物学教室       | 伊藤誠哉 | 梶内吉彦                     | 後藤一雄 |
| 動物学教室       |      | 小熊捍                      |      |
| 畜産学教室       |      | 井口賢三、宮脇富、山根甚信、市川厚一、小華和忠士 |      |
| 農学教室        |      | 前川徳次郎、菊地武直夫              |      |
| 農業経済学教室     |      | 上原轍三郎、小林巳智次、松田武雄         |      |
| 林学教室        |      | 影山純介、中島広吉                |      |

注）巻末一覧をもとに作成し、『北海道帝国大学一覧』で補った。なお、市川厚一の1923年度派遣は、山極勝三郎（東京帝国大学教授）の代理として万国癌研究会への出席を兼ねたもの。

1927年度以降になると、理学部（1930年4月設置）の教授予定者が派遣された。理学部では、1927年度に3名、1928年度に11名、1929年度に1名と、1920年代に15名もの教授予定者を派遣することができた（表4）。

表4 理学部教官予定者の派遣者内訳（1920～1929年度）

| 年度   | 氏名（生没年、派遣年度当時の年齢、専門分野）     |                            |
|------|----------------------------|----------------------------|
| 1927 | 杉野目晴貞（1892-1972、35歳、有機化学）  | 長尾巧（1891-1943、36歳、地質古生物学）  |
|      | 太秦康光（1899-1978、28歳、分析化学）   |                            |
| 1928 | 中谷宇吉郎（1900-1962、28歳、実験物理学） | 中村儀三郎（1893-1934、35歳、実験物理学） |
|      | 山田幸男（1900-1975、28歳、植物分類学）  | 鈴木醇（1896-1970、32歳、岩石学）     |
|      | 功力金二郎（1903-1975、25歳、解析学）   | 吉田洋一（1898-1989、30歳、解析学）    |
|      | 茅誠司（1898-1988、30歳、金属物理学）   | 柴田善一（1901-1945、27歳、無機化学）   |
|      | 松浦一（1900-1990、28歳、植物形態学）   | 河口商次（1903-1984、25歳、幾何学）    |
|      | 原田準平（1898-1992、30歳、鉱物学）    |                            |
| 1929 | 内田亨（1897-1981、32歳、動物系統分類学） |                            |

注）巻末一覧をもとに作成し、『事典日本の科学者』（日外アソシエーツ、2014年）等により補った。

1929年度に派遣された内田亨（1897-1981）は当時32歳、北海道帝国大学理学部が「すぐに洋行させる」という条件を教授予定者に提示していたことを、次のように回想している。

ちょうどその時、大学が方々にでき始めたため、私は浦和高校と武蔵高校の講師をしていましたが、九大・北大の理学部と東北大の農学研究所の三つからの話がありました。その中北大だけがすぐに洋行させるという条件をもってきていました。私としては、今までの研究は独学でもできるので、洋行して新しい方面を学びたいと思い、北大をえらび、ドイツを主に二年近く、その他のヨーロッパの国の旅行も入れて一年近く帰りにアメリカを回り、二年余の後に帰朝しました<sup>12)</sup>。

内田亨は東京帝国大学理学部動物学科で五島清太郎に師事して動物系統分類学を修得し、1923年卒業後は大学院に進学して理学博士を取得、浦和高等学校・武蔵高等学校の講師をしながら、系統分類学以外の分野（動物の感覚生理、雌雄性等）にも関心を深めていた<sup>13)</sup>。九州帝国大学農学部（1919年設置）、東北帝国大学理学部生物学科（1922年設置）・農学研究所（1939年設置）、北海道帝国大学理学部（1930年設置）の新設は、生物学研究者にとって、帝国大学での研究場所が増えたことを意味した。



図3 工学部教授予定者たち  
(1924年5月、ロンドン)  
(No.100-216)



図4 理学部教授予定者たち（1929年4月、パリ）  
(No.100-225)

また、1928年度に派遣された吉田洋一（1898-1989）は当時30歳、東京帝国大学理学部数学科を1923年に卒業後、第一高等学校教授兼東京帝国大学理学部助教授を務めていた。札幌に転任した理由について、吉田は、①理学部創立委員会委員である恩師の吉江琢児教授から吉田を教授候補者に推薦したので、「東北大学出身の河口商次君と、それから東大で、3年後輩の功力金二郎君、…それと僕にいけと。あともう1つ、4講座の予定ですから、代数は3人で相談して決めたらよかろう」と命じられたこと、②父親からも「自分も実は洋行の機会がないではなかったけれど、そのとき断わっちゃって後悔しているから、ぜひ行け」と命じられたこと、③高木貞治教授からも「自分は若い時洋行したけれど、近ごろみんな洋行するのが遅くなった。それは行けないからだ。君のようにまだ若いうちに洋行できるというのは非常にいいことだから、行ったらよかろう」と勧められたと回想している<sup>14)</sup>。吉江琢児教授（1874-1947）と高木貞治教授（1875-1960）は東京帝国大学理科大学数学科第1期生にして日本数学界の二大権威であり、両教授は独逸国（Göttingen）に留学歴を有していた。Henri Poincaré（1854-1912）の原書に親しんでいた吉田洋一は、在外研究員として渡仏して Paris, Strasbourg で研鑽した。

回想にみられるように、帝国大学の新設学部の教官候補者（教授予定者）＝“洋行がすぐにできる”（文部省在外研究員として速やかに海外経験ができる）ことが、新進気鋭の研究者を採用する方策としても機能していたことがうかがえる。

### 2－3．1930～1940年代における文部省在外研究員の派遣内訳とその特徴

1930～1940年代における北海道帝国大学における文部省在外研究員の派遣内訳は、表5のとおりである。

表5 北海道帝国大学における文部省在外研究員の派遣者内訳（1930～1941年度）

| 年度   | 在留地<br>到着者数 | 内訳（部局、人数、在留者氏名）                                   |
|------|-------------|---------------------------------------------------|
| 1930 | 5           | 農学部2（黒澤亮助、土屋四郎）、医学部1（箕島高）、工学部1（武田直秀）、水産専門部1（大島幸吉） |
| 1931 | 3           | 農学部1（大澤正之）、医学部1（高橋信吉）、予科1（廣橋浩）                    |
| 1932 | 5           | 医学部2（田村茂美、猿橋二郎）、工学部2（井口鹿象、道家欽）、理学部1（梅田魁）          |
| 1933 | 1           | 農学部1（中尾清蔵）                                        |
| 1934 | 2           | 農学部1（里正義）、土木専門部1（服部幸一）                            |
| 1935 | 5           | 農学部2（佐藤義夫、【特派】中村幸彦）、医学部1（安保寿）、工学部1（黒岩保）、予科1（東新）   |
| 1936 | 5           | 医学部3（長野泰一、小川玄一、鮎川武一郎）、工学部1（新郷高一）、理学部1（渡邊武男）       |
| 1937 | 1           | 農学部1（【特派】内田登一）                                    |
| 1938 | 1           | 医学部1（木村正一）                                        |
| 1939 |             | —                                                 |
| 1940 | 1           | 農学部1（福山伍郎）                                        |
| 1941 | 1           | 農学部1（長尾正人）                                        |
| 計    | 30          |                                                   |

注）巻末一覧をもとに作成した。

1930～1941年度にかけて計30名が派遣された。工学部・理学部の教授予定者の派遣がほぼ完了し、その内訳は農学部10名、医学部9名、工学部5名、理学部2名、予科2名、土木専門部・水産専門部各1名となった。

農学部では、講座数が30講座（1920年）から36講座（1936年）へと増え、1940年水産学科の新設に伴って、戦前期には41講座（1944年）に達した。講座担任の教授予定者である助教授（大澤正之、佐藤義夫、内田登一等）の派遣が1930年代に進んだ。理学部でも理論物理学講座（1933年）の新設があり、講座担任の教授予定者として梅田魁が1932年度在外派遣となった。

### 3. 北海道帝国大学における文部省在外研究員の選考過程とその特徴

#### 3-1. 各学部における文部省在外研究員の選考過程とその特徴

北海道帝国大学では第一回評議會を1922年3月8日に開催した。佐藤昌介総長のほか、農学部からは教授3名（農学部長：南鷹次郎、宮部金吾、高岡熊雄）、1922年度開講の医学部から教授3名（医学部長：秦勉造、今裕、山崎春雄）が評議員として出席した。その後、1930年度までに開講した工学部、理学部の評議員が加わり、在外研究員候補者の全学的な選考が1932年度の評議會から審議された。

##### (1) 農学部における文部省在外研究員の選考過程

農学部教授会において、在外研究員が議題にあがるのは1921年2月18日開催の教授会からである。議題「在外研究員申請ノ件」のもと、1921年度在外研究員の候補者4名（須田金之助教授、伊藤誠哉教授、小熊捍助教授、井口賢三助教授）を決定している。1920年度の候補者4名が不採択であったため、1921年度も同じ4名を推薦することに可決した。

その後、1922年1月11日開催の教授会では、「協議事項（一）在外研究員銓衡ノ件」と題して、下記のとおり、協議がなされた。

##### 協議事項（一）在外研究員銓衡ノ件

銓衡委員ヲ設ケテ人選ヲナシ後教授会ノ議ヲ附スルコトニ決定ス

尚助教授以上ニ限ラズ助手ノ優良ナルモノヲモ候補者ニ挙グルモ差支ナキコトヲ承認、又教授会ニ於テ候補者ノ順位ヲ決定シテ上申スルコトニ決定ス

大体ノ標準トシテハ講座担任者ノ一定セサル時適任者アラバ第一ノ候補者ニ選定スルコトニ決定ス

農学部では、在外研究員候補者は、教授会とは別に「銓衡委員会」を設けて人選をした後、教授会に諮ることに決定した。銓衡条項としては、①助教授以上に限らず、助手も「優良」な者を候補者としても差し支えないこと、②人選の標準は講座担任者が未定で、適任者があれば第一候補者に選定することに決定した。

「銓衡委員会」の委員には、南農学部長が7名の教授（宮部金吾、時任一彦、高岡熊雄、新島善直、三宅康次、高松正信、小倉鉦太郎）を指名した。7教授は、7部科（農業生物学科、農学科、農業経済学科、林学科、農芸化学科、畜産学科第一部、畜産学科第二部）担当から各1名が選ばれている。早速、教授会閉会後に「銓衡委員会」が開催され、委員7名（三宅教授代理として田所哲太郎教授）が出席のもと、「在外研究員銓衡ノ件」について、次のとおり審議した。

第一大体ノ標準トナルヘキ要項ヲ左ノ通決定ス

1. 講座担任者欠員ノ場合担任予定者トナレルモノ
2. 将来必要ナル学科目担当者ニテ優秀ナルモノ
3. 助教授ニシテ永ク教職ニアルモノハ就職年月ヲ参酌スルコト

#### 4. 研究力、業績ノ如何ヲ参酌スルコト

原則トシテハ大体右ノ標準ニヨリ来年度ノ候補者ハ次ノ如ク決定ス（順位ハ数字ノ通り）

- 一、井口助教授      二、小熊助教授
- 三、上原助教授      四、市川助教授

銓衡委員会では、人選の「標準」について、①講座担任者欠員の場合は担任予定者、②将来必要な学科目担当者で優秀な者、③助教授で長く教職にあるものは就職年数を参酌すること、④研究力・業績を参酌することと、銓衡条項をさらに詳しく定めた。その後、2月8日開催の教授会で、銓衡委員会の決議はすべて承認された。

翌1923年2月8日開催の銓衡委員会では、7教授（宮部、三宅、高松、小倉、小出房吉、星野勇三、森本厚吉）と南学部長が出席の上、6部科からの推薦候補者8名の助教授（上原轍三郎、市川厚一、影山純介、小華和忠士、前川徳次郎、工藤祐舜、山根甚信、三宅捷）について審議し、市川を除く7名から投票により2名（第一順位：上原、第二順位：影山）を決定した。その後、銓衡委員会の決議は、2月19日開催の教授会に諮られたが、新島善直教授が「委員会ノ決議ハ何ニ準拠シテ成セルモノナルカ」と質問し、南学部長が1922年1月11日規定の「銓衡条項」に拠ると答弁、これに対して異議があり、種々議論となり、南学部長が中断させて賛否を挙手で決するほどに紛糾した。議論内容の詳細は不明であるが、銓衡委員会の決議に対する賛否は、出席総数19名中、可が11名で可決したものの、大きな反発があったことがうかがわれる。銓衡委員会の決議は、以下のとおりであった。

- 一、市川助教授ヲ特派研究員ニ推薦ノコト
- 二、在外研究員候補者トシテ一、上原助教授、二、影山助教授ヲ推薦ノコト  
但数字ハ順位ヲ示ス
- 三、市川助教授ノ特派不可能ノ場合ハ一般在外研究員候補者ニ推薦シ其順位ハ第一トシ以下繰下クルコト

その後、上記の1923年度在外研究員の銓衡に係る以外、教授会において銓衡委員会の決議が紛糾した様子は見られない。農学部では、1924年度以降も在外研究員の銓衡委員会が設けられ、その決議を教授会の議に附し、農学部からの推薦候補者を決定した。1939年9月22日開催の教授会議事には、銓衡委員会の委員は「例ニ依リ学科主任ト決定」との記述があり、銓衡委員会は学科主任の教授で構成することが通例となっていたことがうかがわれる。

#### (2) 医学部における文部省在外研究員の選考過程

医学部では、1925年6月11日に「在外研究員候補者選定内規」を制定し、内規に準拠して、医学部からの候補者推薦を行った。上記内規は、下記のとおり、4条文からなる<sup>15)</sup>。

- 一、教授候補者ヲ第一ニ推薦スルコト
- 一、教授欠員ノ講座多数アル時ハ教授会ニ於テ投票ヲ以テ其順序ヲ定ム。

一、各講座担任候補者充実セル時ハ各教授各一名ヅツ推挙シ教授会ニ於テ投票ニヨリ其順序ヲ定メテ推薦ス。

一、在外研究員ノ選定ハ毎年改メテ之ヲ行フ。

医学部では、在外研究員候補者の学部推薦にあたり、①教授候補者を第一に推薦すること、②教授が欠員している講座が多数の場合や③講座担任候補者が多数いる場合は教授会における投票により順序（順位）を定めて推薦すること、④候補者の選定は毎年改めて行うことを取り決めた上で、1925年度以降の学部推薦を実施した。

### (3) 工学部・理学部における文部省在外研究員の選考過程

工学部では第一回教授会を1924年12月3日に、理学部では第一回教授会は1930年3月13日に開催した。

工学部では、1925年3月20日開催の教授会に在外研究員が初めて議題にあがった。1925年度候補者について、1925年度設置予定講座の内、講座担任既定の2名（鉄道学第二講座：小野諒兄、電気機械学第二講座：宗宮知行）を上申することに決定した。その後も、工学部では、選考基準等は確認されず、教室（研究室）からの推薦者を教授会で審議にかけ、学部推薦者を選考して決定している。

理学部では、講座担任の教官予定者を1927～1929・1932年度の在外研究員として派遣が完了していた。在外研究員の推薦が議題に初めてあがったのは、1934年10月30日開催の教授会である。理学部では、教授会の申し合わせに基づく委員会を10月20日に開催し、1934年度在外研究員の選考基準を下記のとおり決定した。

今回ハ其ノ詮衡方法ヲ

- 一、既設講座ノ担任者トナルベキ者ナルコト
- 二、教室全員ガ一致シテ推薦シタル者ナルコト
- 三、助教授、講師、助手其他ヨリ学歴、業績、卒業年次等ヲ考査シテ推薦スルコト
- 四、推薦ハ教授会ニ於テ決定スルコト
- 五、投票ハ学部長選挙内規ニ準スルコト

選考基準の内容は、①講座担任の予定者であること、②教室全員一致の推薦者であること、③助教授・講師・助手等を対象として学歴・業績・卒業年次等を考査して推薦すること、④学部推薦は教授会で決定すること、⑤投票は学部長選挙内規に準拠することであった。

この選考基準に基づき、理学部教授会では、各教室からの推薦者4名（数学教室：福原満州雄助教授、化学教室：岡本剛助教授、地質学鉱物学教室：大石三郎助教授、動物学教室：市川純彦助教授）に対して、投票を3回実施し、学部推薦者（福原助教授）を決定した。

1936年9月18日開催の教授会では、1936年度在外研究員の選考方法を、「各教室ヨリ候補者ヲ推薦シ教授会ニ附議決定スルコト」に決定した。各教室からの推薦者に対して、投

票を実施し、学部推薦者を決定することが、理学部での選考方法となっていたと考えられる。

### 3-2. 1930～1940年代における文部省在外研究員の配当数と選考過程

#### (1) 1932～1941年度文部省在外研究員の配当数

「在外研究員上申ノ件」と題して文部省専門学務局長が北海道帝国大学宛てに在外研究員の上申を照会する際、照会文書に配当数が記載・明示されるようになったのは1932年度以降であった（図5：1931年度、図6：1932年度）。1932年度以降の上申照会文書は1932～1934年度しか確認できず、評議会・各教授会議事録から判断した配当数は、表6のとおりである。

表6 北海道帝国大学における文部省在外研究員の配当数（1932～1941年度）

| 年度   | 配当数 (①+②)     | ①当初配当数    | ②増減数                                 |
|------|---------------|-----------|--------------------------------------|
| 1932 | 4名            | 2名        | +2名 (1933年度から繰上)                     |
| 1933 | 専門部1名         | 2名、専門部1名  | -2名 (1932年度に繰上)                      |
| 1934 | 1名            | 1名        |                                      |
| 1935 | 4名            | 2名        | +1名 (1936年度から繰上)<br>+1名 (1937年度から繰上) |
| 1936 | 2名            | 3名        | -1名 (1935年度に繰上)                      |
| 1937 | 1名【特派】、2名【極秘】 | 1名、1名【特派】 | -1名 (1935年度に繰上)<br>+2名 (【極秘】軍事、資源)   |
| 1938 | —             | —         |                                      |
| 1939 | 2名            | —         | +2名 (重要研究事項)                         |
| 1940 | [1名]          | —         | 全帝大で7～8名 (時局問題)                      |
| 1941 | —             | —         |                                      |

注) 推定は [ ] 表記とした。

そのため、1932年8月16日付上申照会文書（図6）を受けた北海道帝国大学では、1932年8月20日開催の評議会から在外研究員の上申案を審議するに至った。審議方法は、①各学部からの推薦者を学部長（評議員）が説明して投票によって推薦候補者を決定し、②評議会で決定した推薦候補者から、北海道帝国大学として上申する者を総長が選考する（総長一任）という形式がとられた。

しかし、1932～1935年度の配当数が次年度配当数の繰り上げ措置をとっても、4学部で1～2名程度にとどまった。1934年10月12日開催の評議会において、高岡熊雄総長から、1934年度在外研究員費は特に旅費高騰につき、帝国大学全体での割当は8名、東京・京都両帝国大学には各2名、他の帝国大学には1名を配当とするとの文部省専門学務局長との談話が伝えられた。評議会内では1名の配当をどのようにするか決することができず、各学部が現況を報告し、総長宛てに個別に上申することとなった。各学部にも割り当て

られない状況に陥ったことから、「総長一任」は各学部の不満を増幅させ、軋轢が生じた。その後、総長一任の選考方法に対する異議が、1936年度の評議会まで繰り返し出されることとなった。

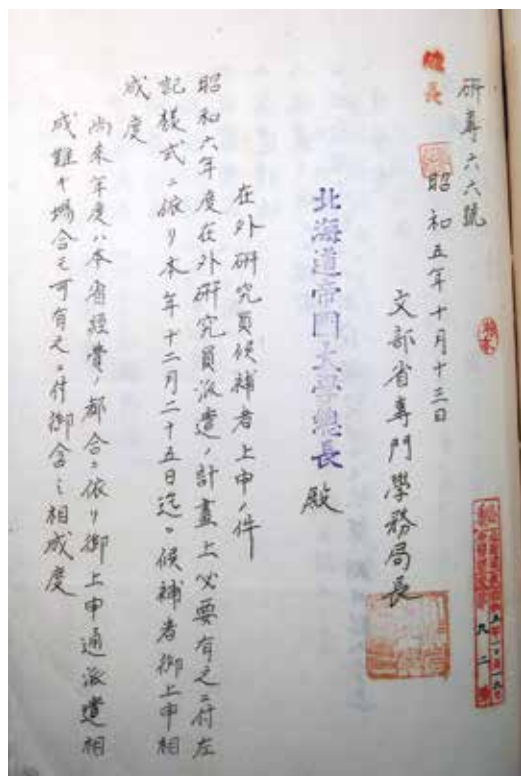


図5 1931年度在外研究員上申照会  
(1930年10月13日付)

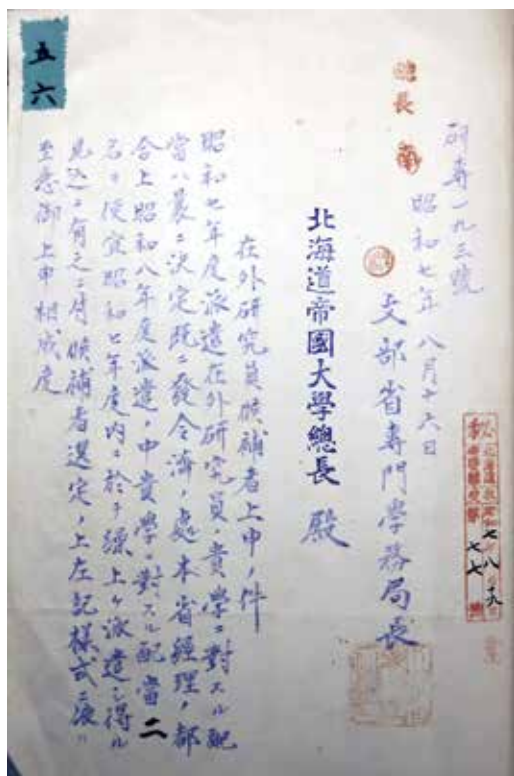


図6 1932年度在外研究員上申照会  
(1932年8月16日付)

## (2) 1937年度在外研究員候補者の選考

1937年11月12日開催の評議会において、1937年度在外研究員の審議に先立ち、高岡総長より、下記のとおり、説明があった。

今回本省専門学務局長ヨリ別紙ノ通（別紙朗読）此際取敢ヘス本学ヨリ右候補者二名ヲ極秘裡ニ選定相成度尚ホ右候補者ハ時局柄軍事又ハ資源関係ノ如キ重要学科研究者ニ限り詮衡セラルルコトト思ハルル旨申越ニ付本件選定ハ特ニ極秘裡ニテ取扱方曩ニ評議会ニ先タチ各学部長ニ御話申上ゲタルモノニ付御了知願度就テハ各学部ヨリ順次候補者推薦理由ヲ説明シテ戴キ度シ

文部省専門学務局長から「極秘裡」に候補者2名を選定せよとの通牒（別紙内容は不詳）があり、高岡総長は、「軍事」または「資源」関係の重要学科研究者に限り銓衡するものと判断し、先に各学部長に説明して候補者推薦を依頼したという。これに従い、農学部

長から助教授 2 名〔福山伍郎：林産製造学（化学工業的利用）、平戸勝七：家畜衛生学〕、医学部長から助教授 1 名〔梅田芳次郎：細菌学（ガス壊疽病）〕、工学部長から助教授 1 名（吉原英夫：原動機学）、理学部長代理から助教授 1 名〔四手井綱彦：幾何光学（赤外線通信）〕の推薦・演説があった。2 名の選考は総長に一任され、12 月 6 日開催の評議会において、第一候補：梅田、第二候補：福山、追加候補：吉原を上申した旨、高岡総長より報告があった。

第一・第二候補に上申となった梅田、福山両助教授について、11 月 12 日開催の評議会における大野精七医学部長、星野勇三農学部長の推薦演説（評議会議事）を、以下に引いておく。

#### 《大野医学部長の演説》

研究主題目ハ瓦斯壊疽ニシテ平時ニ於テハ勿論特ニ戦時ニ於テハ傷兵、軍馬等ノ創傷伝染病トシテ恐ルベキモノナルコトヲ欧州大戦ニ於ケルフランスノ報告等ヲ引例 瓦斯壊疽病原ノ検索並ニ治療及ビ予防ニ関スル研究ハ今日最モ重要且緊急問題ナルコトヲ詳細ニ亘リ説明

#### 《星野農学部長の演説》

研究ハ林産物ノ化学工業的利用ニ関スルモノヲ主目的トシ

（イ）木材ノ「パルプ」化（紙、人絹、ステープルファイバー等ノ製造）

（ロ）木材ノ乾餾（木炭、木瓦斯、木槽、醋酸等ノ製造）

（ハ）木材ノ糖化（砂糖若クハ酒精ノ製造）

（ニ）林産草木ヨリ特殊成分ノ採取（単寧、油類染料等ノ抽出採取）等ニシテ以上ノ研究ハ直チニ資源ノ開発ニ応用セラレ又軍事ニ関係ヲ有スル場合極メテ大ナル点ニ付詳細ニ亘リ説明

上記の上申は 1937 年度には採択されなかった。翌年、梅田助教授は同仁会中支防疫部（1938 年上海に設置）の防疫担当医員として中国へ派遣・出張となり<sup>16)</sup>、南京防疫処長に就いたため、1938 年度以降の在外研究員候補者からは外れることとなった。

### (3) 1939～1940 年度在外研究員候補者の選考と 1940～1941 年度の派遣

1939 年 9 月 28 日開催の工学部教授会によれば、高岡総長より下記の内示があった。「時局問題」に関連なく重要な研究事項を有する者があれば銓衡する見込みであるとの文部省の意向が伝えられ、各学部には候補者 2 名の推薦依頼があった。

事変以来一時壮絶中ナリシ文部省在外研究員ハ其ノ年次或ハ時局問題ニ関聯ナク重要ナル研究事項ヲ有スル者アラバ本省ニ於テ銓衡セラルベキ見込ニ付二名ノ推薦アリタキ

工学部は俣野麻太郎教授〔電気工学（同期発電機の研究）〕、阿部與教授〔鉱山機械学（鉱山圧縮空気機械の研究）〕の 2 名を推薦した。北海道帝国大学からの上申者数は 9 名、農学部推薦の 2 名〔福山伍郎助教授、長尾正人教授（育種学）〕のうち、福山助教授が

1940年4月在外研究員の発令を受け、6月に出発することとなった。

1940年度は、1941年1月30日開催の農学部教授会によれば、1月29日開催の学部長会議において、下記のとおり、在学研究員に関する文部省の意向が伝えられた。

本省ノ在外研究員トシテ七、八名送ル模様ニシテ在留国ハ欧米各国ハ勿論外ニ東亜諸国ヲモ含ミ且ツ科目ハ出来得ル限り時局ニ重要ナルモノト致度趣

文部省在外研究員は7～8人の見込みで、在留国は欧米だけではなく、東アジアの諸国も含み、研究学科目は「出来得ル限り時局ニ重要ナルモノ」と、戦時に結びつく研究学科目が期待された。農学部では、銓衡委員会の審議を経て教授会において3名〔長尾教授、平戸助教授、金俊三教授（森林工学）〕の推薦を決定した。理学部では、1月30日開催の教授会において、昨年度と同じ3名〔岡本剛助教授（電気化学）、大石三郎助教授（層位学・古生物学）、市川純彦助教授（動物学）〕を再び推薦することに決した。

一方、工学部では、1941年2月4日開催の工学部教授会によれば、農・医・理学部は3名候補者を推薦する模様につき、工学部は助教授4名を推薦することに決した。候補者4助教授の研究題目、在留国、在留期間を摘記すれば、次のとおりである。

(1)林猛雄「水工学殊ニ防空及戦禍被害対策上ノ観点ニ於ケル水工学並ニ航空写真ノ研究」(独・伊 2ヶ年)

(2)阿部興「鉦山用空気機械ノ研究」(独 2ヶ年)

(3)久野陸夫「工作機械切削状態ニ於ケル変形及振動」(独・瑞西・伊 2ヶ年)

(4)俣野麻太郎「航空機用電気機器並ニ同期機ノ研究」(独・瑞西・米 2ヶ年)

工学部は、候補者の研究題目に「防空」「戦禍」といった文言を入れ、「航空機」「同期機」といった軍用機器への応用に結びつくような「時局ニ重要ナル」題目に仕立て上げた。

結局、1940年度在外研究員には、農学部推薦の長尾正人教授が1941年3月に内定を受け、4月に出発して独逸国へ向かった。しかし、独ソ開戦のために渡航途中で帰国を余儀なくされ、在学研究員派遣は未完、7月には帰学に至った<sup>17)</sup>。

1940年6月米国へと出発した福山伍郎は、在留期間が2ヶ年のところ、急遽短縮して1941年11月6日に帰国した<sup>18)</sup>。1942年2月帰札した福山は、北海道化学協会の依頼に応じて3月14日開催例会で「滞米雑感」と題した講演をした。福山は、帰国途次の様子について、次のように講演の中で語った<sup>19)</sup>。

私等の引上げた龍田丸が横浜につく前に政府からの諭告が船客一同に配布され、今国内には防諜令が厳しいから米国の事情など一切話さぬ様にせよとの事、米国は自由の国であらゆる通信により一般日本人の知らぬ様な事情も米国の新聞雑誌により広く知られて居るために私等が平気で何等の悪意なく話す事も防諜令に触れる恐れがあり又米国の国力などを率直に述べても恐米思想を煽るものと解される懼れもないとは限らないので斯様な問題には一切触れぬ事にしてゐたのである。

このような状況となつては、欧米での在外研究は不可能であり、北海道帝国大学における文部省在外研究員は、日米開戦直前に帰国した福山伍郎が最後となった。

## むすび

北海道帝国大学は、前身校の札幌農学校（1876～1907年）・東北帝国大学農科大学（1907～1918年）の系譜である農学部のほか、土木専門部・水産専門部・予科等が付設され、1945年までに3学部（医学部、工学部、理学部）を擁した。北海道帝国大学における文部省在外研究員は、1920～1940年度に候補者を推薦・上申し、1920～1941年度にかけて派遣され、派遣者総数は125名に達した。

1920年代、北海道帝国大学では、新設学部（医学部、工学部、理学部）の教官候補者（教授・助教授予定者）でこれまでに海外経験を有していない者を、在外研究員として次々と文部省に上申し、佐藤昌介総長は、1925年度在外研究員候補者の上申にあたり、文部省専門学務局長 栗屋謙に宛てた添え書（1914年3月17日付）に、次のように、上申理由と派遣の嘆願を記している<sup>20)</sup>。

本学明十四年度貴省派遣海外研究員候補者トシテ別紙上申致候処其之内医学部及工学部之分ハ両学部創立之為め必要ナル教授候補者ニシテ未タ派遣無之ものと将来講座増設ノ際必要ナルものとヲ今回申出候次第二付右御了承被下度而シテ農学部及附属専門部ニ属スルものハ既設学部及専門部ニ対シテ教鞭上必要ニ付キ申出候次第二付宜敷御詮議被下度右御依願仕候也

北海道帝国大学の新設3学部（医学部、工学部、理学部）については、教授予定者の在学研究員としての派遣を、1920年代にほぼ完了することができた。文部省は、帝国大学の新設学部の教授予定者には、優先的に、在外派遣を認めていた傾向が見られる。1921年度派遣の中川諭（医学部内科学第二講座担任・教授）が、後年、「その頃、大学の教授には、二年間留学の経験がなければならないということを聞いたことがあります、そういう内規があったのでしょうか」と問われて、「帝国大学の教授になるためには、そういうことがありました。もっとも不文律でしたが」と答えていることにも符号している<sup>21)</sup>。

また、農学部・医学部・工学部・理学部は、教授候補者、とりわけ、講座担任となる予定の者を、在外研究員候補者として推薦した。しかし、1918年以降の高等教育機関の増設によって在外研究員の派遣数が膨れ上がった上に、1930年代には政府の財政難から、在外研究員についての文部省の予算配分が削減された。文部省は、1932年度から配当人数を明示して、上申照会をかけるようになった。北海道帝国大学への配当人数は、1932～1936年度に1～3名程度の当初配当であった。1930年代は、北海道帝国大学にとっては講座担任予定の助教授を派遣することさえ、困難になった。特に、農学部では派遣の停滞は深刻であった。

1930年代、評議会における全学での在外研究員候補者の選考は難航し、各学部の推薦候補者が派遣されないという事態になり、各学部の軋轢が生じた。評議会が決定した推薦候補者について、最終選考は総長一任するという選考過程をとっていたため、総長一任の形式に対する批判も起きた。翌年度の配当数を繰り上げる臨時措置をとって、在外研究員の

派遣を進めたが、4学部における講座の増設もあいまって、配当数だけでは学内の派遣希望を満たすことにはほど遠い状況となった。

そのような中、1937年に日中戦争に至り、通常の枠組とは異なる上申照会が文部省から届くようになる。1937年11月には、文部省専門学務局長から「極秘裡」に候補者2名を選定せよとの通牒があり、高岡熊雄総長は通牒内容から「軍事」または「資源」関係の重要学科研究者に限り銓衡するものと判断し、各学部長に説明して候補者推薦を依頼し、評議会で審議した。評議会では、全学部長が推薦候補者1～2名を出し、候補者の研究内容を「軍事」・「資源」にあわせて詳細に説明し、各自の学部からの派遣を実現させようとした。

1941年1月には、文部省は、在外研究員は7～8名の見込みで、在留国は欧米だけではなく、東アジアの諸国も含み、研究学科目は「出来得ル限り時局ニ重要ナルモノ」と、戦時に結びつく内容を期待した。その期待に応えるように、工学部では、候補者の研究題目に「防空」「戦禍」といった文言を入れ、「航空機」「同期機」といった軍用機器への応用に結びつくような「時局ニ重要ナル」題目に仕立てた。同様に、東北帝国大学においても、1941年2月18日開催の評議会で、推薦候補者の研究題目を、「航空外科学」→「戦陣外科学」(医学部推薦候補者の題目)、「内力及弾性学並弾性振動学」→「航空材料力学」(工学部推薦候補者の題目)に改めている<sup>22)</sup>。戦時下における文部省在外研究員の派遣は、帝国大学に「軍事」「資源」「時局ニ重要ナルモノ」に結びつく研究を要請し、帝国大学もそれに応えて、利用しようとした。

#### [注]

- 1) 1920年9月14日付「文部省在外研究員規程ヲ定ム」(「公文類聚・第四十四編・大正九年・第五卷・官職四・官制四(司法省・文部省一)」、No. 類01337100、国立公文書館所蔵)。
- 2) 1922年1月21日付「在外研究員規程ヲ定ム」(「公文類聚・第四十六編・大正十一年・第二十二卷・軍事・陸軍・海軍、学事・学制・学資・雑載」、No. 類01445100、国立公文書館所蔵)。
- 3) 「廃止令 勅令 大正十一年(一)」、No. 昭54総00897100、国立公文書館所蔵。
- 4) 北大医学部五十年史編纂委員会編『北大医学部五十年史』北海道大学医学部創立五十周年記念会館建設期成会、1974年、335頁。
- 5) 「名誉教授履歴書綴(一)」(北海道大学大学文書館所蔵)を参照。
- 6) 帝大期簿書「教官担当学科目並授業時間数 教官学科配当調 大正九年四月以降 教務部」(No. 帝大2019-0315、北海道大学大学文書館公文書室所蔵)、前掲『北大医学部五十年史』82～83頁を参照。
- 7) 北大工学部五十年史編集刊行委員会編『北大工学部五十年史』北海道大学工学部創立五十周年記念事業会、1975年、13～15頁。
- 8) 「退職者履歴資料 十七、昭和11年」(北海道大学大学文書館所蔵)を参照。
- 9) 前掲『北大工学部五十年史』14～15・41～42頁。
- 10) 1921年2月6日付宮部金吾宛て石川日出鶴丸書簡 (No. 宮部書簡-石川日出鶴丸001、北海道大学大学文書館所蔵)。
- 11) 「農学部創設関係書類」(No. 01A00219、京都大学大学文書館所蔵)。
- 12) 内田亨『象牙の塔の窓から』雪華社、1967年、118頁。

- 13) 前掲『象牙の塔の窓から』117頁。
- 14) 吉田洋一『聞かれるままに』私家版、2001年、74～75頁。
- 15) 「一般例規 医学部」（整理番号：医2013-0002、北海道大学大学文書館所蔵）。
- 16) 前掲『北大医学部五十年史』321～322頁。
- 17) 1941年4月～7月開催の農学部教授会議事、『北海道大学農学部作物育種学講座創立七十周年記念文集』（北海道大学農学部作物育種学教室、1986年、231頁）。
- 18) 1941年11月19日・12月24日開催の農学部教授会議事。
- 19) 福山伍郎「滞米雑感」、『北海道化学協会会報』30号、1942年6月、54頁。
- 20) 「在外研究員関係書類 自大正十二年至大正十五年」（北海道大学大学文書館所蔵）。
- 21) 前掲『北大医学部五十年史』129頁。
- 22) 「評議会議事録 昭和十六年自一月至八月（第五号）」（No. 総務/2006/01-05、東北大学史料館所蔵）。

〔後記〕本研究は、JSPS 科研費 JP 21K0218701及び JP24K0562104の助成を受けたものである。

（やまもと みほこ／北海道大学大学文書館館員）

## 【巻末一覧】

北海道帝国大学における文部省在外研究員一覧(1920年9月14日発令以降)

| 氏名                      | 在外研究期間（在留到着期日～帰国期日）   | 年数             | 在留国        |
|-------------------------|-----------------------|----------------|------------|
| 身分                      |                       | 研究学科           | 学位         |
| 有馬英二                    | 1921.3着～1921.10帰国     | 10ヶ月 英・仏・独     |            |
| （前）朝鮮総督府医院医官兼京城医学専門学校教授 |                       | 内科学            | 医博、医学士     |
| 戸塚文卿                    | 1921.4より学資支給～1926.4満期 | 2年（減給支給、私延1年半） | 米・仏・独      |
| 助手（東京帝大）                |                       | 外科学一般          | 医学士        |
| 中川諭                     | 1921.9着～1923.9帰国      | 2年（短縮27日）      | 独・仏・米      |
| 助教授（医学部）                |                       | 内科学一般          | 医学士        |
| 逸見武雄                    | 1921.10着～1923.12帰国    | 2年             | 米・英・独      |
| 【特派】（前）大学院学生（北海道帝大）     |                       | 植物病理学          | 農博、農学士     |
| 伊藤誠哉                    | 1921.11着～1923.12帰国    | 2年             | 英・米・独・仏    |
| 助教授（農学部）                |                       | 植物学            | 農博、農学士     |
| 高橋栄治                    | 1922.1着～1924.3帰国      | 2年             | 英・独・米      |
| 附属水産専門部教授               |                       | 水産化学           | 農学士        |
| 大野精七                    | 1922.1着～1924.3帰国      | 2年             | 独・仏・米      |
| 助教授（医学部）                |                       | 産科婦人科          | 医学士        |
| 並河功                     | 1922.2着～1924.4帰国      | 2年             | 米・英・伊      |
| 【特派】予科教授                |                       | 園芸学            | 農学士        |
| 高杉栄次郎                   | 1922.4着～1923.11帰国     | 1年半            | 英・米・仏      |
| 予科教授                    |                       | 英語             | Ph.D       |
| 志賀亮                     | 1922.5着～1924.10帰国     | 2年（延滞2ヶ月）      | 独・仏・米      |
| 助教授（医学部）                |                       | 皮膚科泌尿器科        | 医学士        |
| 近藤金助                    | 1922.5着～1924.6帰国      | 2年             | 独・英・米・丁    |
| 【特派】助教授（農学部）            |                       | 栄養化学           | 農学士        |
| 柳壮一                     | 1922.5着～1924.3帰国      | 2年             | 英・独・米・仏    |
| 助教授（医学部）                |                       | 外科学            | 医学士        |
| 大賀恵二                    | 1922.9着～1924.11帰国     | 2年             | 独・英・米・仏・瑞西 |
| 【特派】浅野造船所技師             |                       | 機械工学           | 工学士        |
| 井口賢三                    | 1922.11着～1924.11帰国    | 2年             | 英・米・独・瑞西   |
| 助教授（農学部）                |                       | 牛学及小家畜学        | 農博、農学士     |
| 古藤猛哉                    | 1922.11着～1924.10帰国    | 2年             | 独・英・米・仏    |
| 【特派】鉄道技師（休職）            |                       | 鉄道工学           | 工学士        |
| 木下良順                    | 1922.11着～1926.6帰国     | 2年（私延1年）       | 米・英・独      |
| 助教授（医学部）                |                       | 病理学            | 医学士        |
| 永井一夫                    | 1922.12着～1924.11帰国    | 2年             | 米・英・独      |
| 助教授（医学部）                |                       | 小児科学           | 医学士        |
| 福富忠男                    | 1922.12着～1924.12帰国    | 2年             | 英・米・独・瑞西・仏 |
| 予科教授                    |                       | 応用地質学          | 理学士        |

| 氏名                | 在外研究期間（在留到着期日～帰国期日） | 年数                   | 在留国    |
|-------------------|---------------------|----------------------|--------|
| 身分                |                     | 研究学科                 | 学位     |
| 森岡勇               | 1923.1着～1925.4帰国    | 2年 英・独・米             |        |
| 【特派】助教授（農学部）      |                     | 有機製造化学               | 農学士    |
| 佐々茂雄              | 1923.1着～1924.11帰国   | 1年半（延迫3ヶ月） 英・独・米・諾威  |        |
| 附属水産専門部教授         |                     | 水産製造学                | 農学士    |
| 池田芳郎              | 1923.1着～1924.11帰国   | 2年（短縮2ヶ月） 独・英・米・瑞西   |        |
| 助教授（九州帝大）         |                     | 物理学                  | 理学士    |
| 鷹部屋福平             | 1923.2着～1925.4帰国    | 2年（延迫14日） 独・仏・米・英    |        |
| 【特派】助教授（九州帝大）     |                     | 構造力学                 | 工博、工学士 |
| 小熊捍               | 1923.2着～1925.6帰国    | 2年（私延3ヶ月） 英・独・米・白耳義  |        |
| 助教授（農学部）          |                     | 応用動物学                | 農博、農学士 |
| 根来簡二              | 1923.2着～1925.3帰国    | 2年 英・仏・米・独           |        |
| 【特派】附属土木専門部教授     |                     | 土木工学                 | 工学士    |
| 堀義路               | 1923.4着～1924.12帰国   | 2年（短縮4ヶ月） 独・英・米      |        |
| 【特派】講師（工学部）       |                     | 物理化学                 | 工学士    |
| 奥田彥               | 1923.5着～1925.10帰国   | 2年 英・独・米             |        |
| 【特派】助教授（農学部）      |                     | 農業経済学                | 農学士    |
| 山田紹之助             | 1923.5着～1925.7帰国    | 2年 英・独・米             |        |
| 【特派】（前）鉄道院技師      |                     | 鉱山機械学                | 工学士    |
| 浅見義弘              | 1923.5着～1925.8帰国    | 2年（延迫14日） 英・米・瑞西・独   |        |
| 【特派】研究員（逓信省電気試験所） |                     | 電気磁気学                | 工学士    |
| 阿久津国造             | 1923.6着～1925.2帰国    | 2年（短縮4ヶ月） 独・英・米・仏・瑞西 |        |
| 【特派】講師（工学部）       |                     | 応用力学及機構学             | 工学士    |
| 佐山總平              | 1923.6着～1925.7帰国    | 2年 独・英・米・波・仏         |        |
| 【特派】三菱鉱業（株）       |                     | 採鉱学                  | 工学士    |
| 小串孝治              | 1923.6着～1925.9帰国    | 2年 独・英・米             |        |
| 【特派】助教授（九州帝大）     |                     | 電力及電力応用              | 工学士    |
| 市川厚一              | 1923.6着～1925.7帰国    | 2年 英・独・米・仏           |        |
| 助教授（農学部）          |                     | 比較病理学                | 獣博、農学士 |
| 佐野新三郎             | 1923.8着～1925.10帰国   | 2年 獨・独・米・瑞西・英        |        |
| 【特派】一             |                     | 流体力学及水力機械学           | 工学士    |
| 宮脇富               | 1923.8着～1924.7帰国    | 1年（減給支給） 英・米・独       |        |
| 助教授（農学部）          |                     | 畜産製造学                | 農博、農学士 |
| 井伊谷春平             | 1923.11着～1924.9帰国   | 1年（短縮3ヶ月） 独・仏・米      |        |
| 【特派】教授（名古屋高等工業学校） |                     | 内燃機関及燃料利用法           | 工学士    |
| 中島〔毛利〕高一          | 1923.12着～1925.12帰国  | 2年 英・独・米             |        |
| 助教授（医学部）          |                     | 衛生学                  | 医学士    |
| 大岡叢               | 1923.12着～1925.7帰国   | 1年半 英・独・米            |        |
| 事務官               |                     | 農林行政法                | 法学士    |

| 氏名               | 在外研究期間（在留到着期日～帰国期日）    | 年数         | 在留国        |
|------------------|------------------------|------------|------------|
| 身分               |                        | 研究学科       | 学位         |
| 成田秀三             | 1924.1着～1925.8帰国       | 1年半（延迫14日） | 独・米・瑞西・奥   |
| 予科教授             |                        | 独逸語及語学教授法  | 文学士        |
| 清水義一             | 1924.3着～1924.10帰国      | 1年（短縮5ヶ月半） | 英・瑞西・米・独・伊 |
| 【特派】教授（京都帝大）     |                        | 電気機械製作法    | 工博、工学士     |
| 鳥山四男             | 1924.3着～1926.5帰国       | 2年         | 独・英・米・瑞西   |
| 【特派】助手（理化学研究所）   |                        | 電気牽引及照明    | 工学士        |
| 三浦勝              | 1924.4着～1925.1帰国       | 1年（短縮3ヶ月半） | 独・仏・米      |
| 【特派】教授（秋田鉱山専門学校） |                        | 採鉱学        | 工学士        |
| 倉塚良夫             | 1924.4より学資支給～1924.11帰国 | 1年（短縮6ヶ月）  | 英・独・米      |
| 【特派】（前）関東都督府技師   |                        | 水利工学       | 工博、工学士     |
| 上原徹三郎            | 1925.3着～1927.12帰国      | 2年（私延6ヶ月）  | 英・独・米・伊・亜  |
| 助教授（農学部）         |                        | 植民学        | 農学士        |
| 高桑健              | 1925.4着～1927.5帰国       | 2年（短縮26日）  | 英・独・米・仏・伊  |
| 【特派】講師（工学部）      |                        | 選鉱学        | 工学士        |
| 青葉万六             | 1925.5着～1926.12帰国      | 1年半        | 独・英・米・瑞西   |
| 予科教授             |                        | 物理学及物理学教授法 | 理学士        |
| 影山純介             | 1925.6着～1927.7帰国       | 2年         | 独・仏・米・奥    |
| 助教授（農学部）         |                        | 森林工学       | 林博、林学士     |
| 内村祐之             | 1925.6着～1927.7帰国       | 2年         | 独・瑞西・米     |
| 副手（東京帝大）         |                        | 精神病学       | 医学士        |
| 朴澤進              | 1925.7着～1927.2帰国       | 2年（短縮7ヶ月）  | 英・独・米      |
| 助教授（医学部）         |                        | 生理学        | 医学士        |
| 小野諒兄             | 1925.12着～1926.9帰国      | 1年         | 米・独        |
| （前）鉄道技師          |                        | 鉄道学        | 工学士        |
| 山根甚信             | 1926.4着～1928.9帰国       | 2年         | 独・米        |
| 助教授（農学部）         |                        | 畜産学原論      | 農博、農学士     |
| 小華和忠士            | 1926.4着～1928.4帰国       | 2年（短縮22日）  | 独・米・伊      |
| 助教授（農学部）         |                        | 家畜内科学      | 農学士        |
| 小田俊郎             | 1926.4着～1928.5帰国       | 2年         | 独・米・奥      |
| 助教授（医学部）         |                        | 内科学        | 医博、医学士     |
| 橋本昌造             | 1926.7着～1928.9帰国       | 2年（延迫14日）  | 独・米・奥      |
| 助教授（医学部）         |                        | 外科学        | 医学士        |
| 熊埜御堂進            | 1926.4着～1928.5帰国       | 2年（短縮20日）  | 独・伊・瑞西     |
| 助教授（医学部）         |                        | 外科学        | 医博、医学士     |
| 西田辰三郎            | 1926.4着～1927.12帰国      | 1年半        | 米・独        |
| 附属土木専門部教授兼大学助教授  |                        | 橋梁力学       | 工学士        |
| 宗宮知行             | 1926.4着～1928.6帰国       | 2年（短縮15日）  | 独・米・瑞西     |
| 助教授（工学部）         |                        | 電気機械学      | 工学士        |

| 氏名          | 在外研究期間（在留到着期日～帰国期日）                               | 年数              | 在留国    |
|-------------|---------------------------------------------------|-----------------|--------|
| 身分          |                                                   | 研究学科            | 学位     |
| 上床国夫        | 1926.5着～1928.10帰国                                 | 2年 米・独・露        |        |
| 助教授（工学部）    |                                                   | 応用地質学           | 理学士    |
| 松田武雄        | 1926.8着～1930.9帰国                                  | 1年（減額支給、私延2年）   | 米・英・独  |
| 助教授（農学部）    |                                                   | 農業経済学           | 農学士    |
| 犬飼哲男        | 1926.10着（1927.10.21より学資支給）～1929.3帰国               | 1年（延期1年3ヶ月）     | 米・独    |
| 助教授（農学部）    |                                                   | 動物生理学           | 助教授    |
| 後藤一雄        | 1926.10着～1927.12帰国                                | 1年（減給支給）        | 米      |
| 講師（農学部）     |                                                   | 植物生理学           | 農学士    |
| 岩田正道        | 1926.12着～1927.11帰国                                | 1年（減給支給）        | 独・墺    |
| 助教授（医学部）    |                                                   | 婦人科学            | 医博、医学士 |
| 松岡喬         | 1927.3出発～1927.12帰国                                | 1年（減給支給）        | 独      |
| 副手（医学部）     |                                                   | 薬物学             | 医博、医学士 |
| 青山延敏        | 1927.4着～1928.11帰国                                 | 3年（短縮1年半、延迫14日） |        |
| 予科教授        |                                                   | 独逸語及語学教授法       | 文学士    |
| 小林巳智次       | 1927.5着～1929.12帰国                                 | 3年（私延1年）        | 仏・独・米  |
| 助教授（農学部）    |                                                   | 農林法律学           | 法学士    |
| 岡田正夫        | 1927.5着～1929.7帰国                                  | 3年（短縮1年1ヶ月）     | 独・伊・米  |
| 助教授（医学部）    |                                                   | 解剖学             | 農学士    |
| 佐々木望        | 1927.5着～1927.11.15死去                              | 3年（予定）          | 英      |
| 附属水産専門部教授   |                                                   | 水産動物学           | 理博、理学士 |
| 中島広吉        | 1927.5着～1928.11帰国                                 | 3年（短縮1年半）       | 独・米・伊  |
| 助教授（農学部）    |                                                   | 森林経理学           | 林博、林学士 |
| 児島茂         | 1927.5着～1929.7帰国                                  | 3年（短縮1年、延迫14日）  | 独・伊・米  |
| 助教授（工学部）    |                                                   | 力学              | 工学士    |
| 酒井隆吉        | 1927.5着～1929.6帰国                                  | 3年（短縮1年、延迫14日）  | 独・米    |
| 附属医院薬局長兼助教授 |                                                   | 臓器薬品化学          | 薬学士    |
| 井上善十郎       | （1926.9～欧州出張）1927.6より学資支給～1929.7帰国 2年（延迫4日） 独・仏・米 |                 |        |
| 伝染病研究所技手    |                                                   | 衛生学             | 医博、医学士 |
| 前川徳次郎       | 1927.6着～1929.10帰国                                 | 3年（短縮9ヶ月）       | 独・米    |
| 助教授（農学部）    |                                                   | 造園学並花卉園芸学       | 農博、農学士 |
| 久次米三夫       | 1927.6着～1929.7帰国                                  | 3年（短縮1年、延迫13日）  | 独・米・瑞西 |
| 助教授（工学部）    |                                                   | 機械材料及工作学        | 工学士    |
| 杉野目晴貞       | 1927.7より学資支給～1929.8帰国                             | 1年（延期8ヶ月）       | 独・英・米  |
| 助教授（東北帝大）   |                                                   | 有機化学            | 理学士    |
| 栃内吉彦        | 1928.2着～1930.3帰国                                  | 2年 米・英・独        |        |
| 助教授（農学部）    |                                                   | 植物病理学           | 農博、農学士 |
| 長尾巧         | 1928.3着～1930.2帰国                                  | 2年（短縮3ヶ月、延迫9日）  | 仏・墺・米  |
| 助教授（東北帝大）   |                                                   | 地質古生物学          | 理博、理学士 |

| 氏名                 | 在外研究期間（在留到着期日～帰国期日） | 年数                     | 在留国    |
|--------------------|---------------------|------------------------|--------|
| 身分                 |                     | 研究学科                   | 学位     |
| 太秦康光               | 1928.3着～1930.3帰国    | 2年 米・英・独               |        |
| 助手（東京帝大）           |                     | 分析化学                   | 理学士    |
| 中谷宇吉郎              | 1928.4着～1930.1帰国    | 2年（短縮3ヶ月） 英・独・米        |        |
| 助手（理化学研究所）         |                     | 実験物理学                  | 理学士    |
| 山田幸男               | 1928.4着～1930.3帰国    | 2年（短縮2ヶ月12日） 米・伊・瑞典    |        |
| 副手（東京帝大）           |                     | 植物分類学                  | 理学士    |
| 中村儀三郎              | 1928.4着～1930.2帰国    | 2年（短縮3ヶ月） 独・米          |        |
| 助教授（京都帝大）          |                     | 物理学                    | 理博、理学士 |
| 多和田寛               | 1928.5着～1930.6帰国    | 2年 英・独・米               |        |
| 助教授（工学部）           |                     | 燃料化学                   | 工学士    |
| 鈴木庄治郎              | 1928.5着～1929.12帰国   | 1年半（延追7日） 独・伊・米        |        |
| 予科教授               |                     | 数学及数学教授法               | 理学士    |
| 吉田洋一               | 1928.6着～1930.6帰国    | 2年（短縮1ヶ月） 仏・独          |        |
| 第一高等学校教授兼東京帝国大学助教授 |                     | 数学                     | 理学士    |
| 鈴木醇                | 1928.6着～1930.2帰国    | 2年（短縮5ヶ月） 独・瑞西・米       |        |
| 第一高等学校教授           |                     | 岩石学                    | 理学士    |
| 功力金二郎              | 1928.6着～1930.9帰国    | 2年 仏・波・米               |        |
| 東京高等学校教諭兼教授        |                     | 数学                     | 理学士    |
| 野村男也               | 1928.7着～1929.5帰国    | 1年（減給支給） 独・墺           |        |
| 助手（医学部）            |                     | 細菌学、皮膚病学及花柳病学          | 医学士    |
| 市川厚一               | 1928.7着～1928.9帰国    | 6ヶ月（減給支給） 英            |        |
| 教授（農学部）            |                     | 比較病理学                  | 獣博、農学士 |
| 柴田善一               | 1928.8着～1930.10帰国   | 2年 独・伊・米               |        |
| 助教授（理学部）           |                     | 無機化学                   | 理学士    |
| 河口商次               | 1928.9着～1930.1帰国    | 2年（短縮7ヶ月半） 独・伊・米       |        |
| （前）大学院学生（東北帝大）     |                     | 数学                     | 理学士    |
| 茅誠司                | 1928.10着～1930.9帰国   | 2年（短縮3ヶ月） 独・伊・米        |        |
| 助教授（理学部）           |                     | 物理学                    | 理学士    |
| 松浦一                | 1928.10着～1930.9帰国   | 2年（短縮1ヶ月10日） 米・露       |        |
| 第二高等学校教授           |                     | 植物形態学                  | 理学士    |
| 原田準平               | 1928.11着～1931.5帰国   | 2年（延期4ヶ月） 瑞西・独・米       |        |
| 熊本高等工業学校兼第五高等学校教授  |                     | 鉱物学                    | 理学士    |
| 安田守雄               | 1929.5着～1932.3帰国    | 1年（減給支給、私延1年9ヶ月） 米・英・独 |        |
| 【特派】体育研究所技師        |                     | 生理学                    | 医博、医学士 |
| 大坪喜久太郎             | 1929.6着～1931.11帰国   | 2年 墺・仏・米               |        |
| 助教授（工学部）           |                     | 水工学                    | 工学士    |
| 菊地武直夫              | 1929.7着～1931.8帰国    | 2年 米・独                 |        |
| 助教授（農学部）           |                     | 工芸作物学                  | 農学士    |

| 氏名              | 在外研究期間（在留到着期日～帰国期日） | 年数               | 在留国     |
|-----------------|---------------------|------------------|---------|
| 身分              |                     | 研究学科             | 学位      |
| 内田亨             | 1929.7着～1931.8帰国    | 2年（延迫9日）         | 独・土耳其・米 |
| （前）浦和高等学校講師     |                     | 系統動物学            | 理博、理学士  |
| 箕島高             | 1930.5着～1932.6帰国    | 2年（短縮1ヶ月23日）     | 独・伊・米   |
| 助教授（医学部）        |                     | 生理学              | 医博、医学士  |
| 黒澤亮助            | 1930.5着～1932.4帰国    | 2年（短縮1ヶ月13日）     | 独・伊・米   |
| 助教授（農学部）        |                     | 家畜外科学            | 獣博、農学士  |
| 土屋四郎            | 1930.6着～1932.9帰国    | 2年（減給支給）         | 仏・独     |
| 助教授（農学部）        |                     | 私法学              | 法学士     |
| 大島幸吉            | 1930.6着～1931.12帰国   | 1年（減給支給）         | 英・独     |
| 附属水産専門部教授兼大学助教授 |                     | 水産化学             | 農博、農学士  |
| 武田直秀            | 1930.6着～1932.7帰国    | 2年（短縮2ヶ月19日）     | 独・伊・米   |
| 助教授（工学部）        |                     | 燃料学              | 工学士     |
| 高橋信吉            | 1931.8着～1933.9帰国    | 2年               | 独・伊・米   |
| 助教授（医学部）        |                     | 皮膚科学             | 医博、医学士  |
| 大澤正之            | 1931.9着～1933.10帰国   | 2年（延迫11日）        | 独・伊・米   |
| 助教授（農学部）        |                     | 森林利用学            | 林博、農学士  |
| 廣橋浩             | 1931.10着～1933.1帰国   | 1年半              | 英・独・米   |
| 予科教授            |                     | 英語及語学教授法         | 文学士     |
| 猿橋二郎            | 1932.4着～1933.4帰国    | 1年（減給支給）         | 独       |
| 助教授（医学部）        |                     | 耳鼻咽喉科学           | 医博、医学士  |
| 井口鹿象            | 1932.5着～1934.6帰国    | 2年（延迫2日）         | 独・伊・米   |
| 教授（工学部）         |                     | 河川工学             | 工博、工学士  |
| 田村茂美            | 1932.10着～1934.11帰国  | 2年               | 独・伊・米   |
| 助教授（医学部）        |                     | 眼科学              | 医博、医学士  |
| 梅田魁             | 1932.11着～1935.4帰国   | 2年（私延4ヶ月）        | 独・英・米   |
| 助教授（理学部）        |                     | 理論物理学            | 理学士     |
| 道家欽             | 1933.3着～1935.4帰国    | 2年               | 独・伊・米   |
| 助教授（工学部）        |                     | 鉱山工学             | 工学士     |
| 中尾清蔵            | 1933.4着～1935.4帰国    | 2年（短縮30日）        | 英・独・米   |
| 助教授（農学部）        |                     | 農林地質学            | 理学士     |
| 里正義             | 1934.4着～1934.6帰国    | 3ヶ月（減給支給）        | 伊       |
| 教授（農学部）         |                     | 畜産学              | 農博、農学士  |
| 服部幸一            | 1934.5着～1935.12帰国   | 1年半（延迫9日）        | 独・英・米   |
| 附属土木専門部教授       |                     | 鉄道工学・土木建築材料・実験工学 | 農学士     |
| 東新              | 1935.5着～1937.2帰国    | 1年半（私延1ヶ月）       | 独       |
| 予科教授            |                     | 独逸語及語学教授法        | 文学士     |
| 佐藤義夫            | 1935.5着～1937.6帰国    | 2年               | 独・伊・米   |
| 助教授（農学部）        |                     | 造林学及森林保護学        | 林博、林学士  |

| 氏名           | 在外研究期間（在留到着期日～帰国期日） | 年数              | 在留国    |
|--------------|---------------------|-----------------|--------|
| 身分           |                     | 研究学科            | 学位     |
| 中村幸彦         | 1936.2着～1938.3帰国    | 2年 独・米          |        |
| 【特派】助教授（農学部） |                     | 生物化学            | 農学士    |
| 安保寿          | 1936.2着～1938.3帰国    | 2年 独・伊・米        |        |
| 教授（医学部）      |                     | 病理学             | 医博、医学士 |
| 黒岩保          | 1936.2着～1938.3帰国    | 2年 独・伊・米        |        |
| 助教授（工学部）     |                     | 原動機学            | 工学士    |
| 長野泰一         | 1936.10着～1938.12帰国  | 2年（減給支給） 仏      |        |
| 助手（医学部）      |                     | 細菌学             | 医学士    |
| 小川玄一         | 1936.11着～1937.10帰国  | 1年（減給支給） 独      |        |
| 助教授（医学部）     |                     | 産婦人科学           | 医博、医学士 |
| 新郷高一         | 1937.2着～1939.3帰国    | 2年 独・伊・米        |        |
| 助教授（工学部）     |                     | 構造力学            | 工学士    |
| 鮎川武一郎        | 1937.3着～1939.3満期    | 2年（減給支給） 独・瑞西・仏 |        |
| 助教授（医学部）     |                     | 医化学             | 医博、医学士 |
| 渡邊武男         | 1937.3着～1939.3満期    | 2年 独・加・米        |        |
| 助教授（理学部）     |                     | 応用地質学           | 理学士    |
| 内田登一         | 1937.5着～1939.5満期    | 2年 独・伊・米        |        |
| 【特派】助教授（農学部） |                     | 昆虫学             | 農博、農学士 |
| 木村正一         | 1938.9着～1939.9満期    | 1年（私費） 米        |        |
| 助教授（医学部）     |                     | 公衆衛生教授法         | 医博、医学士 |
| 福山伍郎         | 1940.6出発～1941.11帰国  | 2年（短縮6ヶ月） 米     |        |
| 助教授（農学部）     |                     | 林産製造学           | 農学士    |
| 長尾正人         | [1941.4出発～1941.7帰国] | 2年（予定） 独（予定）    |        |
| 教授（農学部）      |                     | 育種学             | 理博、農学士 |

注）『文部省在外研究員表』、『北海道帝国大学一覧』をもとに名簿を作成し、「退職者履歴資料」・「名誉教授履歴書綴」・「名誉教授称号授与関係書類」（北海道大学大学文書館沿革資料室所蔵）、北海道帝国大学評議会議事録・農学部教授会議事録・理学部教授会議事録・工学部教授会議事録（北海道大学大学文書館公文書室所蔵）等により補った。推定は〔 〕表記とした。